

獨占並に技術的合理化と勞働者階級

影 澤 四 郎

後期資本主義(註一)は獨占到依て特徴付けられる。

(註一) 資本主義は一定の段階に到達するとその様相を一變してしまふ。自由競争を中心とした資本主義を前期資本主義とするならば、「獨占」に依て或る程度の制限を受けるに至る……斯かる資本主義を吾々は後期資本主義と呼ぶ事が出来るであらう。

レーニンに従つて歴史的に之れを見れば次の如くである。

〔Ⅰ〕千八百六十年——七十年。この時期は自由競争の發展の最高點でしかも限界である。やがて獨占の起源を認めやう。

〔Ⅱ〕千八百七十三年の恐慌以後。この時期はカルテルの大發展の時期であつたが未だ例外的で通則的なものではなかつたそれはまだ過渡的現象であつた。

〔Ⅲ〕十九世紀の發展及千九百年乃至千九百三年の恐慌。カルテルはこの時期に至つて經濟生活の基礎となる。

即ち、斯る獨占段階は一九〇〇年更に嚴密に言へば一八九八年より開始せられたのだとせられてゐる。

資本主義經濟に於ける獨占的形態は「自由競争」に依て齎らされる利潤の平均化に對する「反對物」として、資

本家に依つて採られなければならない必然的な一つの自救的手段である。

資本主義の成立と共に經濟的自由主義が生じ、資本家は自由主義に立脚した自由競争に依てより多く利潤を獲得しやうとする。即ち利潤追求は資本主義のイデオロギーとして登場する。而して、之の利潤追求に拍車をかけたものは産業革命に依て齎らされた新たな生産手段の出現及びその改良に依る生産力の尨大なる發展である。利潤追求への斯かる資本家的精神の努力は客觀的には利潤の平均化を實現する。

勞働の生産力の増進、特に、その急速なる進展に依る相對的剩餘價值量の増大は、必然的に資本の有機的構成を高度に導き、不變資本部分と可變資本部分の比を變化せしめ、可變資本は、總資本に對する比例に於て相對的に減少する。利潤の増大は可變資本部分の増大と共に、その歩を一致して進展するものであるから可變資本部分の減少は利潤の平均率を低減せしめる。即ち、資本主義の發展は利潤率下向の傾向をもつものである。之の利潤率低減的傾向にも拘はらず、利潤率の絕對量を増大獲得するためには、自由競争を緩和し又は之を廢除することに依て商品の市場價格従つて、利潤率を高からしめんとする努力の爲めに生産を大規模化しなければならない。斯くして獨占の形態が興へられ、經營の集積、企業の集中、結合が行はれるに至る。之れを資本の方面より見れば企業の結合は資本の結合であり、之れを促進せしめるものは銀行資本である。即ち、銀行資本と産業資本との結合及び前者に依る後者の支配である。(註二)

(註二) 資本家的産業の發展は、銀行資本の集中を發展せしめる。銀行制度の集中は、それ自身カルテル・トラストに於ける

資本家的集中の最高段階に到達する爲めの重要な一原動力である。蓋し、産業に缺くべからざるこれらの貨幣の處分權は銀行の手にあるのだから。そこで資本主義及びその信用組織が發達するにつれて、銀行に對する産業の隷屬が増して來る。他方銀行は……これ等の貨幣が余りに多量でない間は、それを投機信用や流通信用に充用する事に依てこの利子を支拂ひ得た。然るに一方に於てはこれ等の貨幣が増加し他方に於ては投機や商業の重要さが減少するにつれ、それ等の貨幣はますます産業資本に轉化せざるを得なかつた、若し生産信用が絶えず擴大せられると云ふことがなかつたならば、預金の充用従つて銀行預金に對する利子の支拂ひもつくにもつく低下してゐたであらう。事實このことは一部分イギリスに於て起つてゐる。だから銀行への産業の隷屬は所有關係の結果である。産業資本のうちこれを運用する産業資本家の所有でない部分が益々増大する、彼等はこの資本をば銀行資本を通してのみ始めて左右しうるのであつて、銀行に産業を固定せざるを得ない、銀行は之れに依て益々産業資本家となる……ヒルハーデング「金融資本論」

斯かる過程を経過して與へられた「獨占」はその性質とし資本の有機的構成を益々高度化すると同時に他方に於ては、逆に平均利潤率を益々低下せしめんとする……この傾向はあらゆる資本家の利潤を平均利潤以上に保たんとし特殊利潤を獲得せんとする努力に反する、しかもなほ資本家は獨占強化への努力を繼續するだらう、しかもこの努力は益々却つて資本の有機的構成を高度化し、利潤率の低下的傾向はまぬがれざるものとなる。

『かくして、安全と高利の利潤を大規模生産の經濟に依て確保せんとする努力は、次第に増大して行くところの競争過程の激化に依て徒勞に歸してしまふ。』(註三)

〔註三〕 ホブソン、住谷他譯『近代資本主義發達史論』

斯かる獨占への過程は必然的に中小企業家の没落を來たす、獨占の行はれる場合には中小企業家は彼の生産手段から引離されて一個の無産なるプロレタリアに變ずる。而して、彼等の今まで所有に屬してゐた處の生産手段は比較的小數の資本家及び大地主の下に歸屬せしめられ彼等の獨占するところとなる。

『各々の大會社の所有してゐる企業以上に更に一層大なる企業も企劃のための能力がある場合を知るに至る場合には隣接のものに安値をつけ遂には價格を引き下げ、ヨリ弱ヨリ弱小な競争者を没落せしめ、それより強大なる競争者に對しては辛うじて收支償ふ程度まで驅逐せしめてしまふものである。』(註四)

〔註四〕 ホブソン「前掲書」

次にヴァルガが其の「世界經濟年報」に示してゐる中小企業者の破産數及債務額とに依てその没落的傾向を推知し得るであらう。

破産統計

年 度	破 産 數	債 務 額 (百萬ドル)
一八九〇—一九一三	一四、〇〇〇	一八〇
一九二〇	一五、〇〇〇	一八〇
一九二二	二二、五〇〇	二〇二
一九二三	三四、四〇〇	二五六
一九二四	四一、六四九	四八六

即ち、資本家が彼等の利潤の平均化並に減少を防止せんがために必然的に採らなければならなかつたその「反對物」たる手段の「獨占」は、之れを別に云ふならば彼等の利潤を増加せんとする爲めの手段であるからである。従つて、勞働者は以前にも益して資本家の利潤に對する欲求を満足せしめる爲めにはより以下の「不足價值」即ち「不足なる不足價值」を取得しなければならない様になる事は事實である。(註六)

〔註六〕資本主義的生産方法は、社會の價值生産物のうちプロレタリアートの占める分前を減少させる傾向をもつてゐる、何故かと云ふと、生産法の増大に伴つて勞働者の消費にはいつて行く商品の價值は低下し、従つて必要勞働は短かく剩餘勞働は長くなるからである、以前は大きな工業諸國に於ては、全體としての勞働階級の分前、即ち可變資本は相對的に減少したに過ぎなかつた、しかるに最近の發展に依て絶對的減少が始まつた、……ヴァルガ「安定後に於ける資本主義沒落期の經濟」

斯かる勞働者の不足なる「不足價值」の強制は資本主義が獨占段階に入るに至つて最も鮮明な色彩で描き出される、何故ならば、獨占は自由競争を或程度まで廢除制限するとは云へより大きな自由競争の相手即ち大企業間の競争を激化する事に依て利潤率の低下は絶えず行はれるにも拘はらず、資本家のヨリ多くの利潤への追求が驅り立られて行くのであるからその利潤を生むところの勞働は強化し、前にも増して搾取が勞働者階級に強ひられることとなる。しかも獨占は一方に於ては資本の有機的構成の高度なる發展を伴ふが故に可變部分に相對的な減少を來し膨大なる數の産業豫備軍の發生が必然的となつて來る勞働者は可變資本部分に依て雇傭せられるのであるから。

斯くの如く資本主義が獨占形態を取るに至つて勞働者階級は、その勞働の強化と勞働賃銀の壓迫と他方に於ける

驚ろくべき數量の産業豫備軍の發生とのために極度なる階級的壓迫を受けることになるのである。なほ斯かる勞働者階級の社會階級的壓迫に拍車をかけるものとして産業の技術的合理化がある。

二

大戰前に於て比較的順調な道程を辿つて來た世界資本主義は、大戰を契機として資本主義經濟に於ける總ての連絡線は斷ち切れ、國際間に於ける貿易關係及び國際信用組織は破壊せられ、世界に於ける資本主義的市場並に生産界は極度なる混亂に陥入つた。斯かる大戰に依る世界資本主義的經濟の全面的破壊、混亂は決して簡單には回復されなかつた。全ての部面に於て經濟的均衡を失はしめた大戰は資本主義の將來に對して致命的な打撃を與へた。(註七)

〔註七〕生産の減退的傾向、

生産設備と商品の偏在、

生産と消費との不投合、

生産設備は放置にまかされ、不統一、無計畫に使用されるに至つた、斯かる混亂せる資本主義は立て直ほされなければならなかつた。而して、生産機關と生産設備とを統一整理すると共に、勞働時間の増加並に勞働の強度化に依てそれを再編成することが必要となつて來た。

獨占並に技術的合理化と勞働者階級

即ち産業を技術的に合理化する事によつて利潤を獲得せんとする運動が擡頭して來たのである。大戰が合理化運動を急速に促進せしめたと云ふ事は否めない事實であるとしても、その根底には資本家のヨリ多くの利潤追求への欲求が常に働いてゐる事は忘れてはならない、従つて、合理化は新しい事ではなく産業革命以後に於ける技術の發達と共に行はれて來たのであるが最近の如く異様な様相を呈してはゐなかつた、大戰前までは徐々に發達して來たに過ぎなかつた。

『「合理化」は、古い現象に對する新しい言葉である。資本は、利潤を高めるために、技術を改善し搾取の方法を巧妙にして生産費を引き下げること常に努力して來た、只このことが數年間にヨリ組織的に急速に行はれたと云ふに過ぎない』(註八)

〔註八〕ヴァルガ「前掲書」四一頁

合理化を特徴付けるために更に、ヴァルガの言葉を拜借しやう。

(一)『商品價值の低下を意味するところの事象である。労働の生産性の増大、即ち規格化と定型化と標準化とによる商品に含まれたる労働時間の減少もまたこれに屬する、これ等の事象のうち、技術の改善に依る労働の生産性の増大は、資本主義的生産の進歩の模範的形態をなすものである。各労働者は今までよりも大きな複雑な機械を運動し、同一の労働力を支出して更に合目的な労働對象の變形をなし遂げ、そして今までよりも大量の使用價值を生産する。……規格化と標準化と定型化とについて云へば、こゝで問題となるのは技術の改善によつてで

はなくて商品の使用價值の上から見て形と寸法との餘計な差異を淘汰することに依て勞働時間を節約することである。この方法に依て大量生産の法則に準じて勞働時間が節約される。同一の要求を満足する商品がヨリ少ない勞働時間で生産されるのである。……原料の浪費や不必要な運送等を排する方策もまたこの部類に屬する。』

(二)『剩餘價值増大、勞働の搾取の増加である。搾取の増大は、相對的剩餘價值の生産によつて行はれ得る。若しも、上に述べた合理化の方法で勞働者の消費には入いつて行く商品の價格が低下するとすれば、これに依て勞働力の價值も低下する。必要勞働は減少する。そして剩餘勞働は増加する。』

更に搾取の増大は、勞働時間を延長し或は勞働の強度を高めて、絶對的剩餘價を増大せしめることに依て達成される。これ等の二つの方法は、或は一點に達すると相容れないものとなる。即ち、勞働の強度を非常に高くすれば、一日の或は一週間の勞働時間は一定の最大限度を超えることが出来ない。さもなければ勞働者が倒れてしまふからである。けれども資本にとつては、強度を低くして長時間働かせるよりも、最大限度で短時間働かせた方が有利である。何故かと云ふと、不變資本特に固定部分はそれに依てヨリよく利用されるからである。更にまた一日に生産される量が多くても少なくとも、或る種の支出、即ち燃料、燈料、管理、監督の支出に變化はないからである。その上、技術の改善の結果、機械が「時勢遅れ」となる危険に脅かされる。そこで資本は最短の時間内にヨリ大量の勞働力を使用しやうとして焦慮するのである。この目的を達する爲に資本は「科學的經營」と云ふ一つの新しい學問をつくり出した。時間拂賃銀の代りに出來高拂賃銀が現れて来る。……………

すべて之等の事は戦争前に關する事である。最近の發展は一つの辨證法的轉化を示して居る。即ち、時間拂賃銀に復歸した、だがそれは不體傳送帶 (FLIESS BAND) ……後述……の使用を伴つてゐるのである。』(註九)

〔註九〕ヴァルガ「前掲書」

以上の如き諸特徴の爲めに如何に勞働力が産業資本家に依て收奪され、搾取されてゐるかを一勞働力當りの生産額に依て見れば次の通りである。

勞働力と生産額との推移

(一九二五年に於ける指數 一九一九年を一〇〇とす)

	勞働者數	生産物の量	一勞働當りの生産
農業	九三	一〇八	一一八
鑛業	一〇〇	一三三	一三三
工業	九一・五	一二八・五	一四〇
鐵道	九一	一〇四・五	一一五
計	九三	一二〇	一二九

ヴァルガ(前掲書)に依る。

右表に依て勞働の強化程度が察知し得るであらう。之の點に關してヴァルガは又述べてゐる。

『勞働作業率の増大は、技術的變化に基づく勞働の生産性の増大に歸せられるのはほんの一部分だけであつて、大

部分は簡単に労働の強度に歸せられるものだ。』

吾々は總ての人間労働力が機械に依て代置せられて行く事を事實的な前提として、合理化の實際的様相を次の如く把握することが出来るであらう。

〔I〕 従來人間の労働力に依てなされてゐたところの労働は機械に依て代置せられた事に依て異常な生産の膨張……従つて利潤の増加……機械のヨリ有利なる配置のため労働者の過剰。

〔II〕 舊い機械の改良、労働過程の再編成に依て労働過程は部分労働に分解され、單純化されて行く。従つて、生産はヨリ急速となり生産量は増加するが、労働者は過剰となる。

〔III〕 大なる肉體力を必要とした労働は、機械的な方法に依て代置された、その結果として生産の速度を高める事となり、生産を増加せしめ利潤は上昇し、労働者は過剰となる。

技術的合理化は労働を強化せしめるためにフリーズバンドの使用をその目的としてもつてゐる。

『機械組織が進歩し、機械労働者と云ふ特殊の一階級の經驗が蓄積せられるにつれて、労働の速度と従つて強度とが自然發生的に増進して來ることは自明の理である。斯様にしてイギリスでは半世紀間に亘つて労働日の延長と工場労働の強度の増進とが相携へて進んで來た。だが熱病的活動の暫行的な發作ではなく、むしろ日毎に規則正しく反覆される劃一的な活動の特徴とする労働にあつては、労働日の大いさと労働の能率とが相排斥し合ふ結果労働日の延長は労働の強度の低減とのみ、反對に労働強度の増進は労働日の短縮とのみ兩立されると云ふ限

界點に到着しなければならない事は吾々の認めるところである。』(註十)

〔註十〕 マルクス「資本論」第一卷三九一頁 傍點筆者、前掲ヴァルガの言參照

右に引用したマルクスの云ふ相排斥し合ふ二つの力の限界點をフリーズ・バンドは著るしく緩和した。

『連續生産と結合したフリーズバンドは、時間に關する研究や、すべての労働及すべての労働者に對する時間表と云ふやうな大きな監督機關や準備機關をもつたテイラシステムを不用に歸せしめる。フリーズバンドは労働作業率の自動的な監督機關をつくり出し労働者にフリーズバンドの速度を強ひ超人間の強度をもつて労働力を支出することを餘儀なくさせる。だから吾々はこれがあらゆる方面に利用されて居るのを見る。』(註十一)

〔註十一〕 ヴアルガ「前掲書」四五——六頁

斯くしてフリーズバンドは労働者の無意識の中に、しかも機械に依る人間の監督のために人類の生理的限界を無視し……労働の支出量をば極度にまで高めた。而して之に従事するところの労働者の賃銀は何分上昇したとしても之に依て多數の労働者は生産過程から遊離される。而も尙ほ労働過程は細分される故に熟練労働者は不用となり婦人並に小兒労働者にとつて代へられる。今や高級な技術は労働者に不必要となつた。

ヴァルガはシュレージエンの或る襦袢工場に於けるフリーズバンドに依る生産量と他とを比較してゐる。

同一單位時間に於ける労働の成績

個別的な労働による場合

一〇〇

集團作業の場合

二六〇

フリーズバンドの場合

三五〇

フリーズバンドは商品の生産過程に於て、各部分に於ける敏速を計るために、一つの部門から他の部門へ間斷なく然も急速に生産されるべき財が加工され材料から完成まで不體に動いて行く労働過程である。

『労働の機械に於てでなく、工場内の労働の組織のうちに大きな變化が起つた、工場の主要なる中心をなすものは機械ではなくてフリーズバンドである。労働對象が工場の中を進んで行くあひだに機械に適合するのではない労働對象が機械から機械へと渡り歩くのではない、むしろ反對である組織の中心をなすものはフリーズバンドであるそして機械はフリーズバンドの要求に合する様な具合に配置されるのである、種々雑多な機械がフリーズバンドに沿ふて入り亂れて配置されてゐる。必要な道具は——労働者がとにかく道具を取りかへねばならぬ時には——チャント労働者の前に置かれる………』(註十二)

〔註十二〕 ヴアルガ「前掲書」

斯かる合理化運動は今や各種の産業に於て實施せられてゐる。ヴァルガに依て示されたところによれば、エネルギー經濟、作業機關化學工業、交通技術、通信技術等に具體的に現はれて來たのである。

大戰後に於ける産業界の混亂破壊立直しの名目の下に於て資本家階級は合理化は労働賃銀を高くし、労働者の生活水準を高くする事を約した。何故ならば彼等は之れに依て相對的並に絶對的剩餘價值を増進せしめる事に依てヨ

り有利な利潤を確保する事が出来ると考へたからである。

曰く『合理化は資本、勞働並びに時間の節約を意味する、能率が高くなるならばそれはヨリ多くの生産が分配される事を意味するのであつて、勞働者階級の生活水準は高まるであらう。組合は、合理化の第一の成果が勞働者の投げ出しである事を否認するものではないが、それは合理化の約束する利益と相殺せられねばならぬ』註十三

〔註十三〕 一九三〇年アムステルダム・インターナショナルに於けるライバルト、エケルト、メルタンの世界經濟報告。

斯かる言辭を以て資本家は勞働階級の合理化に對する反對的攻勢に備へた。しかしながら事實は決して彼等の言辭を裏付けはしなかつた。吾々は資本主義の發展過程に於て資本の有機的構成の高度化に依て可變資本部分は相對的に減少し、從つて失業者は漸増的傾向にあり、週期的恐慌に依てその數を尠大なものとする事を知る、同時に大戰後に於ける失業が戰前のそれに比して永續性を帯びるに至つた事も知る、獨占形態の發展と産業の合理化とは、斯かる慢性的恐慌從つて失業を克服するものではなかつた。

合理化は勞働過程の再編成、肉體的勞働の機械勞働による代置、生産手段の改善從つて勞働力の強度なる收奪搾取……のために勞働の生産性を著るしく増加せしめ、生産はヨリ少數の勞働者に依て行はれる様になつた。併もなほ合理化は生産費、勞働力並に時間を極度に節約する事に依て生産過程を統一し、その結果として失業を増加せしめた。

『合理化が資本、勞働並びに時間を誰れの爲めに節約したか、それはあまりにも明かな事實であるだらう、合理

化の約束する利益それが若し労働者階級のうる引合であるとすれば、労働者階級はいづこにそれを期待してよいのであらうか』（註十四）

〔註十四〕 有澤氏「カルテル・トラスト・コンツェルン」四三〇頁

吾々は合理化の結果からのみ生じた失業統計的數字をもち得ないが、上述の事よりして合理化の性質が失業を必然ならしめる事を推知するに大した困難を感じないであらう。合理化に依る失業の増加は労働賃銀の下落を招致する、何故ならば失業の存在は労働賃銀を引下げる鉛の役割をなすものであるから。

斯くして生じた失業の増大と労働賃銀の低落とは資本主義的市場を自ら狹隘にして行く、生産の可能性と販賣の可能性との間のギャップは擴大せざるを得ない。資本主義經濟の破壊を治やすため應急手當として持ち來たらされた合理化なる方法は「總利潤のうち最大の分前を確保せんとする個々の資本主義的企業と總資本を出来るだけ多く利殖せんとする階級の利益との矛盾」を尖锐化することに依て自らの桎梏となりつゝある。

〔附記〕 卒業前に起きて來る諸種の事情のために非常に急過的、皮相的なものとなつてしまつたことを御詫びしたいと思ひます。